



1年生 文理選択について

普通科では2年生から文系と理系に分かれます。文系では国語や英語、地歴・公民といった科目が重視され、理系では数学と理科が重視されます。一週間に学ぶ時間数も系統ごとに異なり、内容も大きく変わってきます。この文理選択が進学先を大きく左右することになります。だからこそ、不得意科目から逃げるような選択や、友達に左右されて文理を選択することなどないよう、自分の将来設計をしっかりと吟味して慎重に選択しましょう。

選択の際に参考になるのが、大学・短大や専門学校の受験科目。たとえば、大学の試験科目に数学Ⅲや理科の2科目が指定されている場合は理系を選択しなくては受験できませんし、センター試験で地歴と公民の両方が課されている場合は文系に進む必要があるのでしょ。進路資料室には各大学や専門学校のパンフレットが準備してあります。分からないところは、担任の先生や進路指導室の先生に質問してください。

2年生 グレードアップゼミ・感想

2年生の普通科生徒28名が、8月3日(木)～5日(土)の3日間、甲南高校で行われた「夏トライ! グレードアップゼミ」に参加してきました。台風接近のため、残念ながらほとんどの生徒が2日間の参加ではありましたが、他校の生徒とともに学習して、それぞれが良い刺激を受けて、帰ってきたようです。

以下、生徒の感想です。

- ・「自分のレベルや甘さ、ライバルは種子高生ではなく、もっと広く大きく見なければならぬことなど、いろいろ学べました。思ったから終わりではなくて、じゃあ次にどうつなげなければならぬかを、しっかり考えてこれからの生活を送りたいと思います。」
- ・「どの授業も、話し合ったり、周りと協力する活動が多かったのが、最初に嫌だと思っていた話し合い活動が、いつの間にかコミュニケーションをとる場になっていて楽しんでいました。」
- ・「今回、他校の生徒たちとともに勉強したことで、同じ受験戦争をむかえるという仲間意識を感じる一方で、「自分も負けていられないな」と私のモチベーションも上がりました。だから、「自分が怠けていても、この人たちはずっと頑張っている」と思いながら過ごしていきたいです。」

3年生 国公立大学の個別試験について

いよいよセンター試験の出願が迫ってきましたが、確認ということで、センター試験後に行われる国公立大学の個別試験の概要について簡単に説明したいと思います。

個別試験の概要

国公立大の個別試験は、「前期日程」「後期日程」「中期日程」の組み合わせで最大3校の受験が可能です。ここで注意したいのが、前期日程で合格し、入学手続きを行うと、他の中・後期日程を受験していても合格対象にはならないということです。したがって、**第1志望校は前期日程で受験することが鉄則です。**

後期日程については、定員が少なく志願倍率が高くなる傾向にありますが、実際は前期日程合格者が受験しないことも多いので、合格のチャンスは決して小さくはありません。特に国公立大を志望している場合は、私立大合格だけで安心せずに、**最後まで国公立大を目指すことが重要です。**

前期	学力試験が中心。 英・数・理の中から1～3教科選択が多い。
中期	公立大の一部で実施
後期	小論文・面接が中心。

募集要項について

各大学から、毎年秋ごろ(遅くとも12月中旬まで)に「学生募集要項」が発表されます。入試に関する確定情報が記されていると同時に、出願書類も入っているので、第一志望校はもちろん受験予定校の「募集要項」は早期に入手するようにして下さい。

今後の進路行事

- ・10/10(火)～12(木) …中間考査
- ・10/14(土)・15(日) …進研記述模試(3年)
- ・10/21(土)・22(日) …全統マーク模試(3年)
- ・10/25(水)・26(木) …実力考査
- ・10/28(土)・29(日) …進研記述模試(1・2年)
- ・11/3(金)・4(土) …進研マーク模試(3年)

“Never Give In”

イギリス元首相 ウィンストン・チャーチル



「私に提供できるものは、ただ血と労苦と汗と涙だけであります。我々の目的は何であるかとおたずねになるならば、私は一言でその問いに答えましょう—勝利、この一言です。あらゆる犠牲を払い、あらゆる辛苦に耐え、いかに長く苦しい道であろうとも、戦い抜き、勝ち抜くこと、これであります。」(1940年、イギリス下院での首相演説)

戦後70年が過ぎ、かつての世界大戦の記憶が薄れていく中、イギリスBBCが放送した「偉大なイギリス人」という企画で、イギリス人の視聴者150万人が第1位に投票したのは、写真の人物、ウィンストン・チャーチルであった。

冒頭にあげた演説は、チャーチルが議会で行った演説である。その頃、第二次世界大戦が始まり、ヒトラー率いるナチスドイツがヨーロッパを席卷していたが、イギリスだけが孤軍奮闘していた。そのイギリスの首相にチャーチルが就任したのである。

演説に見られるように、彼はどの政治家よりも雄弁に、そして誰よりも国民を鼓舞し続けた。ドイツによるイギリスへの本土空襲が激しくなり国民の犠牲が増え、でも、彼はナチスドイツには屈しなかった。最終的に、彼の指導力とイギリス国民の不屈の精神によって、ヒトラーはイギリス本土上陸をあきらめることとなる。

こうしてチャーチルはイギリスの危機を救ったのであるが、彼が首相就任に至るまで順風満帆な人生を送ってきたわけではなかった。1874年、名門貴族に生まれたチャーチル。父ランドルフは優秀でエリートコースを歩み、その後、政治家を志して25歳で下院議員に当選、30代後半で大蔵大臣に抜擢された。その秀才の父と異なり、チャーチルは子供のころから勉強が苦手で、特にラテン語が不得意であった。ラテン語の習得は当時の知識人にとって一つの教養であり、チャーチルのような貴族出身の人間にとってはなおさらであった。結局、パブリック・スクールのハロー校の入学試験ではラテン語の問題に1問も答えられず、入学後も4年間成績はビリで、いつも新入生のクラスにとどまっていたという。

そんなチャーチルだったが、在学中一番興味を持って取り組んだ教科が英語であった。英語教師が授業におい

て英文の「解剖」、つまり主語・動詞・目的語・関係節と英文の構造の説明を徹底的に行い、チャーチルもその「解剖」の練習をひたすら行ったという。英語しかできないと見下されていたビリクラスの中で、チャーチルは英文の基礎を徹底的に叩き込まれ、後年文筆家として活躍し、『第二次世界大戦回顧録』でノーベル文学賞を受賞することとなる。またチャーチルは、暗唱も得意であった。在学中に『古代のローマの歌』という1200行に呼ぶ詩を暗唱して、表彰された。この才能は後年政治家として雄弁術を身に付ける際に大いに役立ったという。

その後、父ランドルフが45歳で亡くなり、新聞記者であったチャーチルはやがて父と同じ政治家の道を志すようになる。政治家の道を選んだ後も、彼は努力を重ね、あらゆる書物を読み、他の知識人に負けないくらいの読書量を誇り、また歴代のイギリス政治家の演説から雄弁術を学んだ。それによって、彼の文才と雄弁さに磨きがかかったことは言うまでもない。

彼は戦争中の1940年に母校のハロー校で講演を行った。そこで繰り返したのは「never give in (決して屈するな)」という言葉であった。チャーチルは、自由と正義を政治の信念とし、それに反するものとは徹底的に戦う姿勢を示してきた。特に自由・民主主義を否定する独裁者ヒトラーとの戦いは絶対に負けられないものであった。

私は不屈の精神で苦しくても必ずや勝利をつかむという彼の考え方の根底には、彼自身の苦勞しながら努力を重ね成功してきた経験が反映されていると思う。そして、チャーチルの活躍なくして、現在のイギリスの存在はありえず、彼の存在が混迷深まる21世紀において、なおイギリス人の心に今も生きていることに、その偉大さを感じる。

最後に、チャーチルが残した名言の中で、この言葉を高校生のみなさんに贈り、文章を締めたいと思う。

Success is the ability to go from failure to failure without losing your enthusiasm.

(成功とは、失敗を重ねても、やる気を失わないでいられる才能である。)

[参考文献]

- ・W・チャーチル『わが半生』(2014, 中央公論新社)
- ・木畑洋一『チャーチル イギリス帝国と歩んだ男』(2016, 山川出版社)
- ・木原武一『天才の勉強術』(1994, 新潮選書)
- ・中西輝政『チャーチル名言録』(2016, 扶桑社)

文責：有村 稔(地歴公民科)